

# 地域社会における巨大イベントの受容過程

井戸 聡

## I はじめに

### (1) 万博の閉幕、そして現在

2005年日本国際博覧会（略称・愛知万博）が閉幕して1年以上が経過した。2204万人あまりを動員し、当初予想をはるかに超える盛り上がりを見せ<sup>1</sup>、また主催者である日本国際博覧会協会の運営収支も約129億円という想像以上の大幅な黒字を計上し、愛知万博は「最高の結果」で終わったという高い評価を一般的に受けている。万博開幕以前は、前売り入場券の売れ行きが不調で、金券ショップに前売り券が流れ、それにすら買い手がなかなかつかない、あるいは愛知万博の認知度の低さが世論調査の結果に表れるなど<sup>2</sup>、不人気振りや関心度の低さが囁かれていた。だが、そうした当初の懸念や不安は一体何だったのであろうか、と思わせるほどの盛況ぶりをみせつつ幕を下ろした。

現在では万博が開催された愛知県内を中心に閉幕1周年を記念する各種のイベントが開催されている<sup>3</sup>。万博閉幕後、1年以上の時間が経過しているにもかかわらず、愛知万博と関連するイベントが各地で開催され、多数の参加者や観客を集めており、愛知万博のイメージ・キャラクターのステージ・ショーやキャラクター・グッズも相変わらずの人気を誇っている<sup>4</sup>。愛知万博関連の情報はイベントのお知らせやニュース報道として各種メディアを通じて現在でも流され続けており、「万博」という言葉はニュースや情報のキーワードとなっている感すらある<sup>5</sup>。愛知を中心とする東海地区に限定していいことではあろうが、熱狂ともいえる大盛況のうちに幕を下ろした愛知万博は、終幕して1年以上経つ現在でもその余熱を保ち続けているといえよう。

以上のように、「万博」はいまだ人々の興味・関心を集めるブランドとして健在であり、種々の事物の商品価値を高める力を保持し続けている。「万博」

は賞味期限切れすることなく話題性をもち続けているといえよう。

さまざまなイベントや情報、グッズなどが「万博ブランド」商品として流通し、「万博」が閉幕後も消費し続けられているのと並行して、愛知万博の検証・総括といった作業が一方で進められている。たとえば、愛知万博を総括し評価する各界からの発言や決算報告の結果がさまざまに報道されている<sup>6</sup>。このような政治的・経済的な方面からの検証・総括とも関わるだろうが、社会的には万博理念を継承する事業や活動がさまざまに実施されている<sup>7</sup>。これらの社会的な動向は万博や万博後の社会を読み解く上で注目されるべきであろう<sup>8</sup>。

以上のような愛知万博後の万博にまつわるさまざま事柄は、万博を反芻する社会的実践の集合と置き換えて差し支えないであろう。万博後の社会は、さまざまな領域からあらゆる角度で、万博をあらためて浮かび上がらせる作業を繰り返し行い続けているといえる。

2000年頃から、大阪万博（1970年開催）以来35年ぶりに開催される愛知万博が機縁となったのか、過去の万博や博覧会がどのようなものであったのかを探る書の出版が相次いだ。日本万国博覧会（大阪万博）をはじめとして1980年代にブームとなった地方博覧会や明治にさかのぼる内国勸業博覧会、その他の各種の博覧会が学究の俎上に乗せられるようになった<sup>9</sup>。

愛知万博を終えていまだ万博の余勢が残り続け、また愛知万博を切っ掛けとして各種博覧会研究がにわかに盛り上がりを見せるに至った現在こそは、愛知万博とは何であったのかが追究されてしかるべき時期にあるといえるのではないだろうか。このような時運と筆者は偶然にもめぐり合わせをもつ機会を得た。しかも万博会場のひとつである長久手会場に隣接する大学に奉職するという境遇においてである。筆者をはじめ数名のメンバーが学内に設置された地域連携準備室の研究プロジェクトのテーマのひとつとして「愛知万博」を取りあげ、メンバーそれぞれの専門から万博を検証することになった<sup>10</sup>。

そもそも万博開催前から「万博」に関する議論が盛んであることが特徴的であったのが、今回の愛知万博であった。愛知万博の是非や存在意義などについて、さまざまな議論を展開する言説空間が形成されていたのである。社会学的な観点からすれば、愛知万博は空前の「万博論議」の盛り上がりを見せた点、つまりいわば言説空間としてのもうひとつの「万博」を構成した点で、

これまで開催されてきた他のさまざまな博覧会とは一線を画す特徴的な万博であったといえることができる。

愛知万博については、開催以前から各種の問題や争点をめぐってそれぞれの立場からの見解や意見が、メディアを通じて主張されるなどの議論が展開されてきた。博覧会の公式テーマ決定までの推移のプロセスや、会場計画をめぐる自然環境保全と開発主義のせめぎあいの過程で、さまざまな見解や提言が示され論議されてきたことは記憶に新しい。これらの論議をはじめとして、万博関連事業などの採算性、展示内容に対する懸念、商業主義に対する是非など、多岐にわたる問題や課題が洗いだされつつ、万博論議が展開されてきている。これらの万博に関する話題や各種の意見は、新聞・雑誌・テレビ・ネットなどのメディアを通じて発信されてきた<sup>11</sup>。

多岐にわたる議論のなかから焦点化されたいくつかの 이슈をめぐって、啓発活動や市民運動が展開され万博の賛否を問う県民投票を求める署名運動へと拡大したこともあった<sup>12</sup>。その結果として計画段階から理念やプランへの様々な変更や修正が加えられ、紆余曲折しながら開催に至った万博であることは報道やルポルタージュなどによって知らしめられているとおりである<sup>13</sup>。

万博論議は学問的な立場からも種々行なわれてきた。たとえば、都市計画や農業土木、公共政策や自治などの各領域からの発言が続けられてきた。そうしたなかでより社会科学的な観点からの学究も試みられてきている。代表的なものとしては、愛知万博の存在意義や理念あるいは研究者や専門家のかわり方について社会哲学的考察を行なった吉見の研究(吉見, 2000; 2001; 2005a; 2005b; 2005cなど)、リスク社会における「愛・地球博」の象徴性についての時代診断的な考察(成, 2005)、市民参加型社会と愛知万博の関係についての究明(石原, 2005; 松浦, 2005; 永安, 2005; 後, 2005など)を挙げることができる。

開催に先立って重層的に多様な議論が展開されたことで各種の論点が洗い出されてきた。このような点でこれまでにない特徴的な「万博」であったことは確かである。

以上のようにして浮かび上がってきたさまざまな論点のなかで、本稿が取

り上げようとするのは愛知万博と地域社会の関係である。愛知万博以前に開催された数々の博覧会についての研究では、万博と地域という観点、とりわけ万博開催地周辺の地域社会や地域住民からの視点によって万博を考えるとこのような問題意識は総体的に希薄であったといえる。だが、先述した愛知万博の種々の論議においては、「地元」の視点から万博を考える論点が浮かび上がり、このようなパースペクティブからの研究も行なわれるようになってきた。万博周辺の「地域社会」に光が当てられるようになった点も、今回の愛知万博のこれまでにない特色といえる。

「地元」と万博の関係についての先行する研究の成果としては、町村が中心となった研究グループの報告集を代表的な例として挙げることができる（一橋大学社会学部町村ゼミナール編，1999；2002；2005）。ただし、これらの研究報告で考察の対象となっている「地元」に該当するのは、主に愛知県瀬戸地域となっている<sup>14</sup>。それには愛知万博の理念形成や会場計画の推移や地元自治体の会場誘致などの歴史的経緯が背景となっていることが大きく関係している。1999年に会場計画が大きく変更を加えられるまでは主たる「地元」といえば瀬戸地域であった。瀬戸市や市内諸団体は会場候補地として手を上げ熱心に万博誘致活動を行ってきたし、瀬戸市内の予定地での会場計画案が繰り返し練られてきた。有力候補として挙げられていた会場予定地一帯の山林が、貴重な自然や生態系を湛える森林帯であるために保全されるべきであると市民団体や自然保護団体らが開発を批判する見解を主張して、「環境戦争」が繰り広げられた事実はよく知られているが、その舞台となった「海上の森」も瀬戸市内に位置している。諸問題の解決を狙って1999年に打ちだされたのが、海上の森での会場規模を縮小し、隣接する愛知県長久手町の愛知青少年公園を主会場化する分散会場案であった。実に万博開催予定の2005年のわずか6年前のことであった。

開催間際になって、突如メイン会場の役回りを振り当てられたのが長久手であった。1999年を期に万博会場構想は大きく変化してゆくが、同時に万博に関連する「地元」として長久手が浮かび上がってきたともいえる。万博会場の構想は二転三転したため、候補地と関係する「地元」もその都度変わっているといえる。だが、これまでのさまざまな博覧会研究では博覧会と地域社

会との関係についてはほとんど対象化されてこなかったし、愛知万博に関する研究に限ってみても、博覧会と地域社会との関係について対象化はされているが、瀬戸地域を射程とした研究が大勢を占めており、本稿の対象とする長久手地域における万博と地域社会の関係についての研究の報告例はほとんどない<sup>15</sup>。

本稿では「長久手会場」のおかれた長久手地域を調査対象としており、万博と地域社会の関係についての分析を行ない、考察を加えるものである。愛知万博の開催に先行する研究報告の集大成的な論集として、万博会期中に出版された『市民参加型社会とは—愛知万博計画過程と公共圏の再創造』(町村・吉見編, 2005) では「長久手町と万博の関係は、本書のなかでも必ずしも十分な光を当てることができていない問題であり、さらに考えていく必要がある」と長久手地域と万博の関係についての研究の必要性について言及している。このような意味でも、本稿は先行する愛知万博研究の手薄な部分に厚みを加えることに寄与できるであろうと考えている。

以上のようなことを踏まえたうえで、本稿における目的は、万博開催地周辺の地域住民への聞き取りを中心とした質的調査をもとに、「万博」をどのような経験として受け取ったかという地域住民と万博の関係性の一端を浮かび上がらせることにある。すなわち、巨大イベントとしての愛知万博は、開催地の周辺地域住民にとってどのような「万博」経験となったのかを分析・考察し、また同時になぜそのような「経験」として受けとめられたかという点に解釈を加えるものである。

## Ⅱ 長久手地域と愛知万博

### (1) 調査地概要

調査は愛知万博の開催地である愛知県愛知郡長久手町で行なった。

長久手町は愛知県の北西部に位置し、名古屋市、豊田市、瀬戸市と隣接する<sup>16</sup>、面積約21.54平方キロメートル、17,772世帯、人口44,444人(2006年9月30日現在)の町である。1584(天正12)年の小牧・長久手の戦いの舞台となった長久手は「古戦場のまち」「歴史のまち」として知られてきたが、2005年の愛知万博開催によって、「万博と歴史のまち」と称されるようにもなっている。

町内中央部を香流川が東西に流れ、流域には低地が広がり、その周囲には侵食によって形成された起伏のある丘陵地帯が続いている。近世まで純農村であったが、丘陵地で地質が悪く野菜の生産に適さないことから、明治期には換金作物の栽培に取り組む農家が増加し、たばこ栽培や養蚕が盛んになった。その後も開墾・開拓や土地改良事業が進められるなど変容していったが、長久手町の農業が大きく変貌したのは昭和40年代である。この頃を境にして都市近郊農業化が進み、兼業農家が増え専業農家はほとんどみられなくなっていった。

またこの時期には、名古屋市に隣接する西部を中心に開発が著しく進んでベッドタウンを形成しはじめ、住宅地化、商業地化していった。ベッドタウン化した地区に新住民が流入することによって、この頃から長久手町の人口・世帯数は飛躍的に増大していく。1965（昭和40）年には人口7,500人あまりであったが、1975（昭和50）年に約14,500人、1985（昭和60）年には約25,500人、2001（平成13）年には約43,300人と4万人を超え、現在でも増え続けており、「人口の伸びにまちの発展があらわれています」<sup>17</sup>と評されている。町内には愛知医科大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学、愛知県立大学の4大学があり、トヨタ博物館、名都美術館、長久手町文化の家、長久手町福祉の家といった文化福祉施設が存在し、愛知青少年公園<sup>18</sup>や長久手温泉のようなレジャー施設のほか多数の市民公園が整備された文化・文教のまちであるとされている。

町内西部を中心としてベッドタウン化・文教街区化してきた長久手町ではあるが、一方で東部地域は市街化調整区域に指定され、現在でも農地としての土地利用や林野がかなり多くみられる地域でもある。東部地域では山林や田畑が広がっており、稲作のほか畑作や果樹栽培がみられる。旧来の伝統的な農村の集落景観を残すとともに、村落共同体的な社会的つながりを現在でも機能させ続けている部分も少なくない地域となっている。

長久手町はこれまで数回の合併を経て現在に至っている。1878（明治11）年に大草村と北熊村が合併して熊張村となり、1889（明治22）年に熊張村、前熊村が合併して上郷村が発足、1906（明治39）年、上郷村と岩作村・長湫村が合併して長久手村となり、1971（昭和46）年には長久手町となった。熊張、

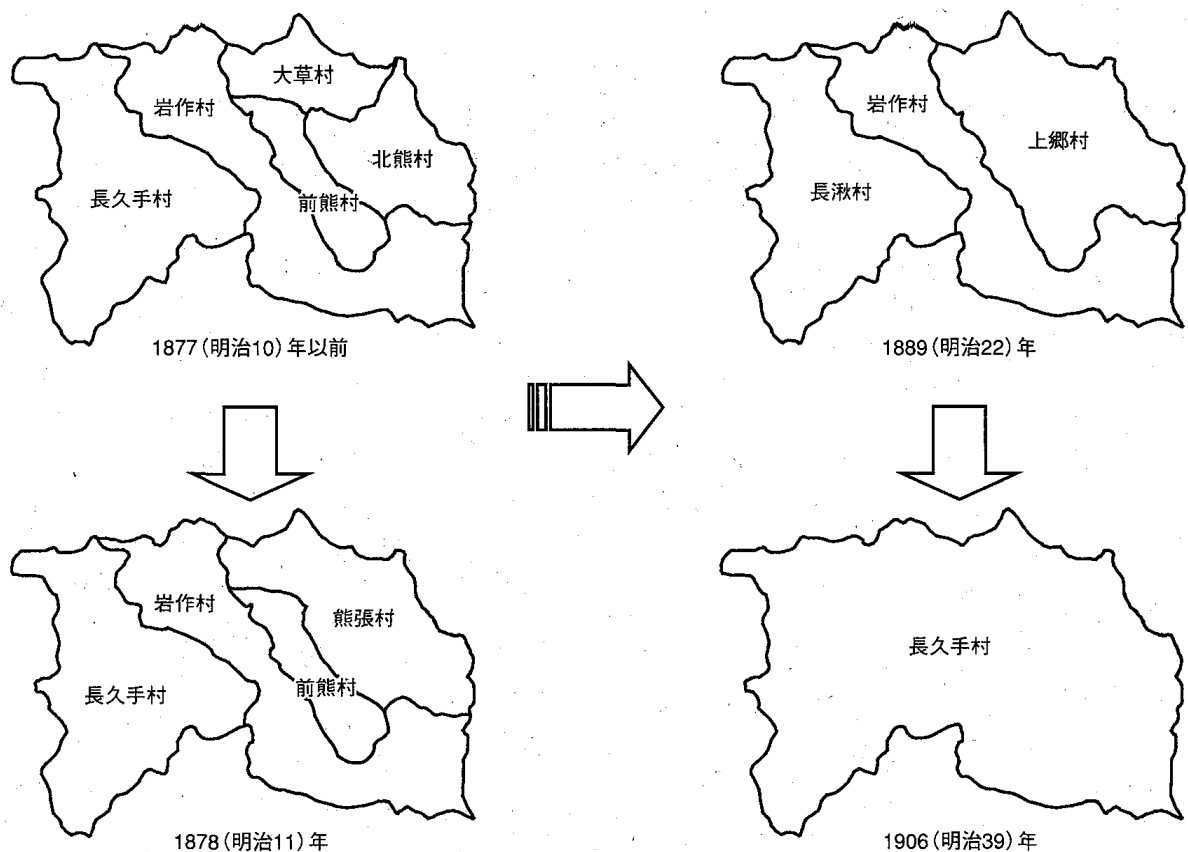


図1 合併の変遷

前熊、岩作、長湫は現在でも大字を表す地名として使用されている(図1)。

以上のような地域特性と歴史的経緯をもつ長久手町では、地域的な特性の違いや文化的差異などが東西で顕著であることを特徴としている。誤解を恐れずに単純化すれば、長久手町の西部に位置する長湫地区はベッドタウン化した住宅地・商業地、東部の上郷地区は伝統的村落形態がかなり残されている地域、中央に位置する岩作地区は両方の地域特性の混在地域、となっている。これら東西の地域的特性や文化的特性の差異、新旧住民の意識の違いなどは、住民の声からするとかなり自覚的に認識されているようである。

愛知万博の「長久手会場」は長久手町東部に位置する愛知青少年公園を用地として利用することで造成され、万博のメイン会場として使用された。先述したように、長久手会場は瀬戸市での万博会場計画が自然保護問題等で紛糾した際に、代替案としての分散会場化の候補地として提案され、1999年に会場予定地として組み込まれることが決定した。愛知県が1989年に万博構想を立ち上げ<sup>19</sup>、瀬戸市が会場候補地に決定したのは1990年である。万博をテコ

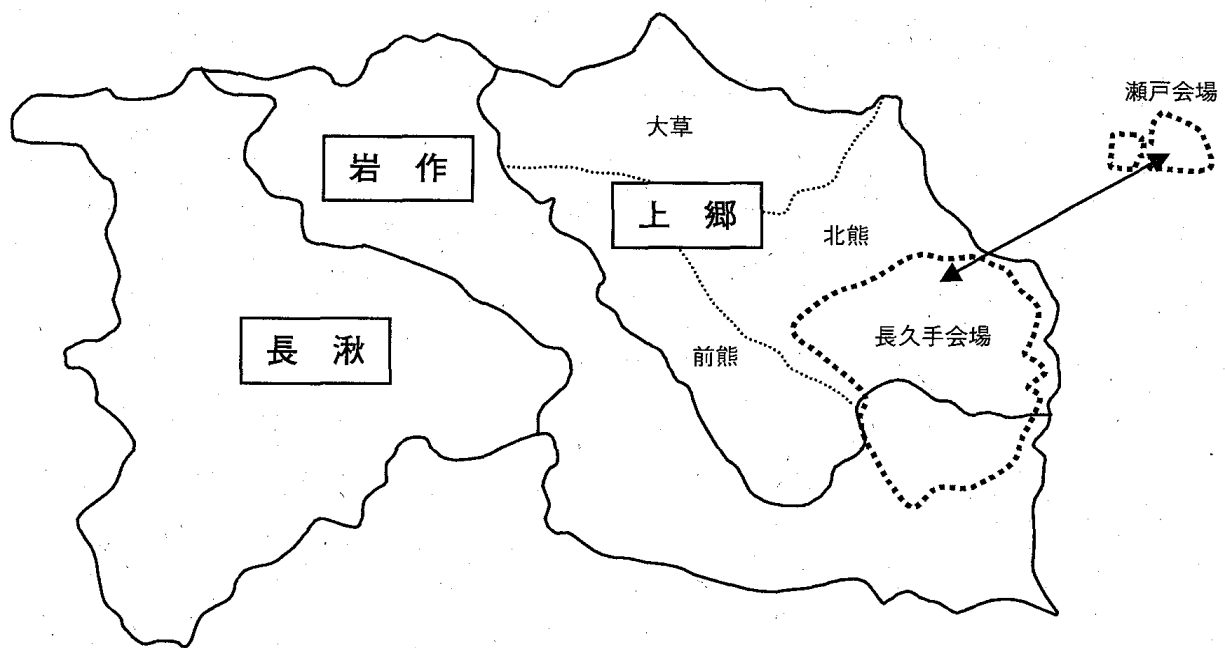


図2 長久手会場の位置

に進められる予定であった住宅開発事業や万博構想の当事者として、瀬戸市は万博構想立ち上げ当初から直接的なかかわりをもっていた。それに対して、瀬戸市に隣接するとはいえ、万博とは直接的な関係はなかった長久手町に突如もたらされたのが長久手会場であったといえる。

長久手会場の用地として使用された愛知青少年公園は、上郷地区と岩作地区にちょうど跨るような場所に位置している(図2)。土地の権利関係からいえば、愛知青少年公園の土地は愛知県の所有である。ただし公園内にあるいくつものため池は近隣地区の水利権が設定されており、農業用水として使用・管理されている。また公園内には近隣集落の水神を祭る神社が存在し、毎年祭礼が執り行われている。また愛知青少年公園と香流川に挟まれた土地やその周辺の土地には個人所有地、地区の共有地があるが、これらの土地が万博関連施設や駐車場の用地として工事期間を含めた万博開催期間中、借り上げられていた。近隣地区からは長久手会場まではすぐ目と鼻の先であり、徒歩や自転車で気軽に行ける範囲にある。

## (2) 調査内容

調査は、愛知万博の会場となった「長久手会場」の周辺地域を「地元」と



して捉え、長久手会場の用地として使用された愛知青少年公園が位置していた長久手町東部地域を中心に行なった。調査は聞き取りを中軸に据え、適宜資料調査を行い、万博の開催期間中の2005年9月から万博閉幕後2006年8月にかけて行なった。主な対象としたのは岩作地区、上郷地区(北熊区・前熊区)であるが、長湫地区での聞き取りも必要に応じて行なった。現役区長や歴代の区長経験者や地区役員経験者、伝統芸能保存会メンバー、氏子、一般農家、商工会、商業者などから話を伺った。地域社会とのつながりが深いと考えられる長久手地域での居住年数が長い年配者を主な対象としてインタビューを行なった。なお、聞き取り調査等から得られた資料に加え、愛知県立大学地域連携準備室として行なった愛知県長久手町民に対するアンケート調査の結果を適宜使用していることを断っておく。

### Ⅲ 語られた「万博」経験

#### (1) 万博理念についての言及

愛知万博と地域住民とのかかわりについてインタビューした内容から、いくつかの着目すべきポイントを読み取ることが可能である。

まず、①：万博の提唱する各種の理念(環境／交流／市民参加／IT)への言及はほとんど見受けられなかった点である。万博の「大義」ともいえるこれらの理念については、それほど関心が向けられていなかったようである。万博の掲げるテーマ「自然の叡智」についての認知度についていえば、確かに高かったといえるが、人々が愛知万博の4つのテーマを強く意識し、関心を強く向けていることが窺われるような語りを聞くことはほとんどなかった。

わずかにテーマについて言及したものとしては、次のようなものをあげることができる。上郷地区の男性A(60代)は万博の「メッセージよりも楽しさ」の印象が強く刻まれていることを述べている。また村の祭礼に使用している山車を地区で万博に出展することになった体験と関連させつつ、「(山車出展について)正直、負担感があった。でも経験になったし、交流できた」(男性B・70代・上郷地区)と付帯的に「交流」について述べられるケースもあった。また、万博の掲げるテーマが抽象的で難解であることについて、「なにが自然(の叡智)、なにが言いたい(のか分からない)」(男性C・70代・岩作地

区)との声も聞かれた。

このように万博のテーマについての積極的な姿勢や態度を示唆するような、あるいは深い理解に基づく実践を示すような内容の話を聞き取ることはできなかった。これらのことから人々が万博の理念に対する深く積極的な関心や興味を抱き、それに促された行為や実践が導き出されるというようなことはほとんどなかったと推察できる。ただし、これは万博の理念について人々が否定的であったということの意味するものではない。万博テーマについての自発的な言及がない場合に、万博テーマについてどのように思うかを訊ねたところ、返ってくる回答として多かったのは、肯定的な意見であった。もちろん上述のような否定的と受け取れる回答もなかったわけではないが、それも積極的な否定的態度を示すような発話ではない場合がほとんどであった。多くの人々は消極的あるいは受動的な肯定的態度であったように見受けられた。

## (2) 「万博」と地域社会

つぎに②：「万博」が地域社会の問題として語られる場合についてである。本稿の問題関心から予測されていたのは、開催地の「地元」として「万博」は地域環境の大きな変革をともなう一大関心事ではなかつただろうか、よって地域社会レベルで対処すべき課題として「万博」が認識されていたのはいか、ということであった。たとえば、当初、候補として検討されていた瀬戸地域では、瀬戸市、瀬戸市議会、自治会連合会、商工会議所、愛陶会、輸出卸組合、珪砂組合などが誘致活動を行なって積極的な態度を示していた。地盤沈下する地域経済の状況の下、万博を景気浮揚や地域活性化へ結び付けようとする期待や、道路・インフラ整備などの地域開発への期待があった。また他方では、住環境悪化・自然環境破壊・経済効果の少なさなどの悪影響も大きな懸念となっていた(町村, 1999)<sup>20</sup>。

長久手地域でも、とりわけ、主にインタビューを行なった東部地区では、瀬戸地域と同じように期待や反撥を抱きつつ、「万博」を捉えている可能性があるという初期の予想があった。長久手町東部地域は、農村的景観が色濃く、住宅地化・商業地化した西部地域とのさまざまな差異を自覚的に認識してい

る。そのため、西部地域との「地域格差」を「是正」するひとつの契機として「万博」を位置づけていた可能性も存在していたはずであると予想したのである。また他方で、瀬戸地域の「海上の森」をめぐる「環境戦争」といわれるような騒動という隣接地域での揉め事を長久手地域の人々は聞き及んでいた。そのために、万博がやってくることを快く思わず迷惑に感じる人々も少なからず存在していたのではないだろうかという予測もあった。

だが、結果的にいえば、長久手地域では万博に対する地域社会レベルでの関心は思いのほか低かった。万博に対して、地域社会レベルで対処すべき課題として捉えるような積極的な態度や関心を示すような内容については、万博を受け容れるにしても拒むにしても、ほとんど聞かれることはなかった。インフラ整備や経済波及効果など地域開発や地域振興への事前の大きな期待について語られること、あるいは地域振興策を導くことができなかったという悔いや失意も含めて、語られることはほぼ皆無であった。また、万博の受け容れに関しても強い反撥があったという意見は聞かれなかった<sup>21</sup>。

長久手地域では万博を「テコ」に地域経済の浮揚や社会基盤の整備を当て込むというような期待感をおよそ抱いていなかったこと、また万博の受け入れに関して強い反発的な態度を示すようなことがなかったことは、以下のような発話の内容から窺われる。上郷地区の地区役員経験者の男性D(60代)は、当初、万博にはあまり興味がなく、自分たちには関係のない話だと感じていたようだ。1999年の会場計画変更ですぐ近くの青少年公園に万博が来ることになったということ、新聞記事ではじめて知ったという。計画変更についての関係者からの事前の説明や打診などは一切なく、「唐突」なことであったという。万博に対しては、地域の人々は寛容で反対意見は大きくはなかったようで、「まあ来るなら来るで、それは解決しなければいけない話であって、それがどうのこうのということにはならないだろうという気持ち」であった。別の男性E(60代・上郷地区)も「反対する人はいなかった」と述べている。

また岩作地区でも事前の説明はなく、「天から降ってくるよう」な突然のできごとであった(男性F・60代・岩作地区)。同地区でも万博の受け入れに関しては「受け身」であって、特段の反対も開発を望む考えもなく、「この万博に関連する周辺の村の人たちは、あんまり変化を、万博によって大きな生活、

付近の環境の大きな変化は、あまり発展させるということは好んでなかったんだと思いますね」と男性Fは述懐している。上郷地区での聞き取りでも、「静かな、のんびりした地区」（男性E）であって、生活で特別に「不便ということはない」（男性A）と感じていると、生活環境への不満がなく現状に肯定的である声が聞かれた。

長久手町の商工会での聞き取りでは、万博の景気を当てにすることについて、冷静に見通していたことを伺った。商工会では、万博は「185日」限りの「一過性」のものであって、過去の博覧会や巨大イベントを省みてみれば、「万博特需」を当て込むことは、利益というよりもむしろ不利益のリスクがともなうものではないだろうかという落ち着いた態度で臨んでいたという。

以上のことから、特筆するような地域社会からの万博への期待や反撥はなかったということができよう。

わずかに地域社会の問題として語られたのは開催期間中の交通問題や治安悪化への危惧、水利権をもつため池への影響などであった。

交通渋滞への懸念は万博開催前の心配事として広く聞かれた意見であった。たとえば、上郷地区の男性B（70代）は「（開催以前は）渋滞を心配しとった」と述べているし、愛知県立大学地域連携準備室で行なったアンケート調査の自由記述には「交通不便で道路は渋滞し、生活に支障をきたし」と万博開催前の否定的な評価の理由が述べられている（愛知県立大学地域連携準備室編, 2007）。万博会期中には万博会場周辺の3キロ圏内での交通規制が行なわれたが、当初、情報の周知が十分でなかったため、これも交通上の不安感を招く一因となっていた。

また、治安の悪化を心配していたことについてしばしば耳にした。万博前に、上郷地区で区長を務めていた男性Dによれば、「いちばん心配していたのは、いろんな人が入ってくるんで、それこそ何が起こるかわからない」と「不審者」への懸念があったという。そのため、地域内の自警活動をするこまで考えたそうだが、実際には警察が常時巡回するというこで自警組織の結成にまでは至らなかったが、その他にも長久手町セーフティステーションへの見回り依頼を行なうなど、地域としての治安を求める動きをみせていたことを読み取ることができる。また東名高速道路と接続する長久手インター

チェンジが完成したが、これを「長久手の将来にとって良いこと」(男性B)と捉える向きもある一方で、「出張犯罪」を引き起こすのではという不安を掻き立てるものとして受け取る人々もいた。

万博会場内にあるため池は、上郷地区の二集落が水利権をもっており、特に水不足の年には重要な水源となってきた<sup>22</sup>。このため池をイベント・ショーに使用するので、水を落として水位を下げないでほしいという主催者側の意向があったため、地元との協議が重ねられた。このため池のことも地域にとっての懸案であった。

地域社会レベルの課題とまではいえないが、次のような生活上の不便について、万博と関連する話題として挙げられた例についても紹介しておく。「ヘリが上空の同じところで旋回して、あわてて焚き火を消した。警察や消防署に通報されてこられると困ると思って」「車の渋滞で畑に行くのが不便」(女性A・70代・岩作地区)、「道が広くなると、畑に通いづらい(近所の老人たちの声として)」(男性B)。

しかしながら、以上のような諸課題も万博の開催期間中だけの「辛抱」と受けとめられていた。また、実際に万博が開幕してみると、予想されていたような交通渋滞は「まったくなかった」(男性G・70代・上郷地区)と認識されているし、治安についても「平常どおり」で「大丈夫だった」「心配したことはなかった」(男性A)といい、むしろ「交通規制や警備のおかげで治安が(以前よりも)良くなった」「(事前の)不安とは逆に安心」(女性A)と感じられていた。生活環境上の大きな悪化は、予期していたほどには感じ取られることはなく、かえって会期中の方が治安の良さや安心を感じとったという意見が多数聞かれた。ため池についても大きな問題とはならなかった。農業用の水源であるため池の使用方法についての協議が博覧会協会と行なわれていたが、主催者側が「気を遣ってくれた」という対応振りであったため、不満の種とはならなかったそうである。

結果的に愛知万博が地域社会に対してどのような影響を与えたのかについては、肯定的な意見が大半を占めた。「(長久手地域の) 宣伝になった」(男性A)、「古戦場の長久手」から「万博の長久手」へ」「知名度アップにつながった」(男性D)という地域イメージ向上についての意見や、「(リニモが

できて) 便利になった」(男性E)、「インターができたのは、長久手の将来にとって良いこと」(男性H・70代・岩作地区) など社会資本整備の充実についての意見もあった。また、以前は暗い道であったところに「防犯灯」が付けられたことや、坂道をよじ登って行くしかなかった会場内にある水神を祭る神社につながる石段が万博終了後も取り払われることなく残されたことを喜ぶ意見も聞かれた。

ただし、これらの万博に関する「よかったこと」は、事前の目算をもとに地域が能動的に働きかけて獲得していったものとは認識されておらず、「たなぼた」であって「天から降るよう」にもたらされたものであるという受動的な結果的利益であったという見解が複数の人々によって表明されている。

以上のことから、次のようなことがいえる。

長久手地域では、現状の生活環境や住環境に肯定的であり充足しているため、特別な変革志向を抱いていない傾向が読み取れる。一部では積極的に万博に関与することがむしろデメリットにつながる危険を孕みうるとして、万博に対して静観していたことから、現状に対して肯定的・維持的・充足的な傾向があるといえる。また、現状肯定的であると同時に、万博が現状の生活環境・社会環境の悪化を招くことにつながりうるということをそれほど重視して考えていなかったという傾向を読み取ることもできる。

つまり、長久手地域では、万博に対して目立った期待や反撥はなかったものであり、地域社会として特段の関心を寄せる対象とはなっていなかったことが判明した。

長久手地域では、万博を切っ掛けに地域社会の利益を獲得しようとするよりも、むしろ現状が変化しないようにすることに関心が向けられていたといえる。それは万博による利益誘導よりも、万博による生活環境への悪影響に対して気を配られていたことについて多くが語られたことから理解できる。しかし、懸念されていたようなことも、一時的な変化に過ぎないと受けとめられていたし、実際には、憂慮されていたようなことはほとんど引き起こされず、これらの心配は杞憂となった。結果的に「万博」は多くの期待をかけられることもなく、また強い反撥もなく、割とすんなりと受容されたということになる。

換言すれば、長久手地域における「万博」とは、地域社会レベルで積極的に取り組み対処すべき課題というような社会的コンセンサスの対象として設定されることはほとんどなかった。すなわち、地域社会レベルの問題としては構成されなかったといえることができる。

### (3) 「万博」の体験

上記二点に対して、相対的に多く聞き取ることができた内容として、③：さまざまなかたちでの愛知万博への参加の体験を挙げるができる。

周辺地域の人々は、さまざまな仕方で愛知万博に参加・関与したということがインタビューで語られた。

しばしば聞かれたのは、万博へ足を運んだ回数の多さについての語りである。「10回以上行った、夕方からが多かった」(男性E)、「20回以上行った」(女性B・70代・上郷地区)、「30回以上行った(昼から)(妻・友達と)(ひとりでも)」(男性A)、「48回(夕方からが多かった)(自転車で)」(男性D)などである。また、当初の予想に反して、足繁く出かけるようになったことについては、「(前売り券を買っていたが)一回行ったら面白くなって(全期間入場券を買って何回も行った)」(男性A)、「(一回券から)通し券に(交換した)」(男性E)などがある。

万博を振り返って「楽しかった」という感想が多数聞かれ、なかには「もっと行っとけばよかった」(男性A)という声もあった。

周辺地域の人々が、どのように万博に参加したかについては、さまざまな目的や動機、関与形態が語られた。

目的に関しては、開幕してまもなくは各パビリオンを見に行っていたが、すぐに回りつくしてしまい、それからは日替わりで行なわれるイベントやショーを目当てにしていたという女性や、「加山雄三を見に行った」という男性のように、当初、脚光を浴びた企業パビリオンやシンボリックパビリオンにほどなく飽きてしまって、二次的なイベントへと関心が移行したことが窺われた。そのほか、万博以前は近所の喫茶店で集っていたのを、会期中は集いの場を万博に移していたという女性グループや、以前から続けていた日常的な散歩のコースを開催中の万博会場に変えたという夫婦、あるいはすべての

外国パビリオンの夜景を写真に収めることを「使命」として自転車で通いつめた男性、入館待ちに長蛇の列ができるようになると、そこに並んで前後の人たちと話すことを楽しみに出かける男性など、“万博”であることの必然性を感じさせないような水準で「万博」を楽しむ人々の体験が聞かれた。

また、万博に向いた動機については、「孫が万博を観たい」とせがんだから、あるいは名古屋市内に住む「子供たちがやってきたから」というものや、孫や子供あるいは親戚に会いたいがために招き寄せた、職場で知り合いになったパビリオンの外国人スタッフに会うため、というような「万博」を人的交流の便宜的な手段として用いるような例もあった。これらの例からもわかるが、必ずしも“万博”であることにこだわっているような理由や動機が述べられることはほとんどなかった。なかには「(妻がかつて)つくば博に行ってるから」自身も行ってみたいと思ったという男性Bのように“万博”であることを根拠として示した例もあるが、聞き取りのなかでは、このような“万博”である必然性については、どちらかといえば副次的な理由として述べられるに過ぎなかった。

万博への関与の仕方としては、入場者として万博に出かけるほかに、秋祭りで使用する山車を万博の催し物として出展することになった集落の取り組みや、パビリオンで流される映像で手話を披露する予定の子供たちに、手話を教えることになった手話サークルメンバーの関わり方、万博のため共有地を貸し出している責任感から自発的・個人的に見回りや不法投棄物の回収を行なう地区役員の活動、ゴミ拾いのボランティア活動、知り合いになった外国人スタッフを個人的に自宅に招いてのもてなしなどの例があった。

これらの地域の人々の参加や関与の体験は大別して次のような二つの類型に分類することができるだろう。

(X) 楽しむ対象としての「万博」と (Y) 動員される対象としての「万博」である。

#### (X) 楽しむ対象としての「万博」

聞き取りを行なった周辺地域の人々のなかでは、愛知万博へ一度も出かけなかったという人はほとんどみられず、さらに、万博に出かけたことのある



人々は複数回の入場経験のある「リピーター」であった。総じて、彼・彼女らは「万博」に「楽しかった」「もっと行くとけばよかった」などの好印象を抱いている。また、万博での楽しみ方は画一的ではなく、それぞれに多彩な楽しみ方をしながら「万博」を享受している様子が窺えた。

万博では主催者サイドの提供する、あるいは各種メディアによって形成される“万博”のイメージや情報によって、人々の万博の楽しみ方や見方が規定されてくる部分があるが、周辺地域の人々は必ずしもそれらに限定されることなく、それぞれの個人的な状況や置かれた環境に応じて万博の楽しみ方を創発し、個人的・個別的な文脈から万博を享受する枠組みを創り出している例がみられた。万博を既成の“万博イメージ”とは異なる水準で個人的文脈の網をかけ「万博」として消費し、個々人と「万博」との関係を多様に構築していた。

#### (Y) 動員される対象としての「万博」

愛知万博では上述のような、「楽しむ」万博としての自発的な参加もみられた一方で、他者からの要請を引き受けるかたちでの受動的な「万博」への関与も見受けられた。たとえば、開幕以前は万博に行くことはほとんどないだろうと見越していたが、付き合い上、前売り券を購入しなければならなかったという話はしばしば耳にしたことであった。また、ゴミ拾いなどの清掃活動や会場周辺の見回りも地域ネットワークを通じて動員された「ボランティア」であった。また、万博での各種イベントや展示制作への協力やボランティア活動などの体験について話を聞くことができたが、たとえば、集落の村祭り用の山車の出展は、地域ネットワークを通じて要請され、断るわけにいかず引き受けたが、かなり負担感の伴う協力活動であったという。

以上のようなことから、括りだせる参加体験の特徴のひとつは、「市民参加」というような個人の主体的・自発的な参加というよりも、種々の地域ネットワークを通じて参加せざるを得ない状況におかれるというように受動的な参加状況である。

(X) は能動的・積極的な万博体験であり、(Y) は受動的・消極的な万博体験となっている。ただし、(Y) から (X) への移り変わりというように、

一連の変化の過程として両者が関連づけられる場合もかなりある。

#### Ⅳ 「万博」経験の個別的性格

ここでは、前章までに述べてきたことについての考察を行なってみる。

万博のような巨大イベントが地域社会に創造される場合、それはどのような意味をもちうるだろうか。たとえば、観光論の文脈に依拠すると、1980年代バブル期のユートピア的な「リゾート」の創造とは、非日常的な空間を日常空間である地域社会に創りだそうとすることであり、仮想空間であるリゾートと現実の地元社会の論理とはつじつまの合わないこともあり、矛盾を孕んだ行為となりうる。万博も地域社会(日常空間)に創りだされる非日常空間である以上、地域社会へのさまざまな影響を及ぼし、社会的な関心の対象として 이슈化する可能性が予測された。現に瀬戸地域では万博をめぐる地元地域社会を巻き込んだトラブルが発生した。

しかし、これまでみてきたように、長久手地域においては万博をめぐる地域社会が紛糾するというような大きなトラブルはなかった。そもそも、地域社会レベルの問題として、万博という課題が設定されていることを物語るような内容が語られる場面に遭遇することはほとんどなかった。地域への説明活動の回数の少なさもそれを示す傍証のひとつであろう<sup>23</sup>。

その一方で、長久手地域の人々によって語られた「万博」の体験は、それぞれの個人や少人数の集団内という小さな社会的範囲のなかでのエピソードに偏っていたといえる。

これらを抽象化すれば、「万博」は地域社会や地域共同体の 이슈として経験されたのではなく、非常に個別的な性格の色濃い、個人あるいは小集団の 이슈として経験されたといえる。つまり、この地域では、人々と「万博」との関係は、社会的な位相ではなく個人的な位相で文脈づけられていたのである。

##### (1) 開催地の特性

ではなぜ「万博」は地域社会や共同体のような社会的水準としてではなく、個人や小集団といった個別的なものとして経験されたのか。

ひとつは「長久手」という開催地の特性が関係していると考えられる。

当初、有力な開催候補地であった瀬戸地域では、旧市街地域の経済的地盤沈下への対策や伝統的産業である窯業・陶磁器産業の活性化が地域的課題となっていた。万博やそれがもたらす関連事業は、瀬戸地域の抱えた諸課題を解消する起爆剤として大いに期待されていた。

一方、長久手町は名古屋市に隣接したベッドタウンであり、昭和40年代以降急速に市街地化が進行した町域である。昭和40年代を境に急増しはじめた人口は、現在でも増加し続けており、町内の高齢化率も極めて低い<sup>24</sup>。長久手町は「発展」し続けている地域であって、町財政も比較的安定しており、総体的に町としての課題の少ない町といえ、瀬戸地域のように深刻な課題に頭を抱える地域ではない。

長久手町内には大学・博物館・美術館・研究機関・文化の家・福祉の家・公園・温泉などの文化・教養・福祉・保養施設が集積しており、住民の居住に対する満足度も高い。それは長久手町での住民意識調査の結果にも表れている<sup>25</sup>。

長久手町においては、万博のテーマが「環境」に落ち着いたということもあって、万博跡地の開発や周辺林野を切り拓いていくような地域開発主義的な計画はなされなかった。リニモや長久手インターチェンジ、道路などの建設・整備が行なわれたが、一方で万博会場の跡地は原状復帰が原則とされ、たとえば広大な駐車場は万博終了後、水田に戻された。だが、長久手地域においては、もとより万博による地域へのテコ入れは必ずしも必要であると意識されていなかったといえる。どちらかといえば、長久手地域の人々の意識は生活への満足度が高く、現状肯定的であって変化を望んでいない。それは、長久手町東部の田園風景が広がる地域の人々についても当てはまる。農村的な集落景観を残す地域での生活への満足度が高く、今のままの村落景観を残して欲しいという意見が多かった。少数意見として、道が狭い・暗い、さびれているなどの農村的な難点を指摘する意見も聞かれたが、1980年代から下水道が整備されるなど、社会資本の整備についての不満もほとんどないということであった。

農村的な不都合を嘆くよりもむしろ、農村的な静かさや安らかさを支持す

る意見が多い東部地域では、万博を契機としたインフラ整備や経済効果などの急激な地域社会の変化よりも、不満のない現在の生活を維持し続けることにより大きな関心があったといえる。よって、開発や社会資本整備を獲得するために「万博」を地域社会レベルでの課題とするような共同性をもつ必要がなかった。また、万博の原状復帰という原則によって、地域の現状維持が担保されていたため、万博の影響による変革に対して地域社会レベルでディフェンシブに対処する構えをとる必要も生じなかった。さらに、185日間という期間限定のイベントであったことも関係するであろう。万博の影響として懸念されていたことも、万博期間中だけの「辛抱」と受けとめられ、地域社会レベルでの大きな問題とはならなかったのである。

その結果、地域と万博との関係を意味づける確固たる社会的文脈が形成されることがなかった。地域社会にとっての「万博」の位置づけはあいまいなままだったのである。だが、人々は身近に突如訪れた万博と交わらないわけにはいかない。人々と「万博」を接続する地域の共同的な枠組みを共有することのないまま、人々は万博と向き合わざるを得なかったのである。ゆえに地域社会内で構築される統一的な「万博」の文脈に委ねることができず、他のなにかを参照せざるを得なかったと考えられよう。

## (2) 焦点のぼやけた「あいまいな万博」

地域社会内で「万博」と個人とを結びつける枠組みが構築されなかったために、個々の人々は他のなにかを参照しなければならなかったとして、その際、どのようなものが「万博」と個人との関係を規定する可能性があるだろうか。

ひとつは、“万博”の文脈であろう。主催者サイドの提供する、あるいは各種メディアによって形成される、あるいはまた一般世論によって社会的に構成される「公式化」された“万博”のイメージや情報である。

しかし、結果的にいうと、これらのものが人々と「万博」との関係を規定したり、あるいはそれらのものに入々が寄り添ったりすることはなかったといえる。

たとえば、愛知万博では「公式情報」として4つのテーマ（環境／交流／市民参加／IT）が掲げられている。しかし、こうした万博理念が訴求力に乏

しいことについては先に述べてきたとおりである。また、メディアによって形成されていた“万博”の情報についても、周辺地域の人々によって「行くとしても1回か2回」と見積もられていたように、それほど興味を掻き立てるものではなく、これも影響力は強くなかったといえる。前評判の高かったパビリオンや見せ物であっても、ふたを開けてみると不評であったり、ひととおり見終えてしまうと飽きられてしまったりと、万博開幕以前に形成されていた万博情報は、周辺住民にとって依拠すべき対象とはならなかった<sup>26</sup>。

このように「公式化」された“万博”に人々は準拠し得なかったといえる。それは、抽象的な万博理念の抱える具体的内実の見えにくさや万博情報の信頼度などに起因するものかもしれない。また、万博開催前には一般世間での認知度が低い上に、一般的観測として悲観的な色合いが濃かったことの影響も考えられる。

しかし、“万博”の文脈に周辺地域の人々が寄り添えなかったのは、上述のようなことも含めて、今回の万博についての捉え所のなさが要因となっているのではないだろうか。「捉え所のなさ」とは、言い換えれば愛知万博の「あいまいさ」ともいえる。

たとえば、愛知万博の存在意義についてである。愛知万博は先述したように、その存在意義をかつてないほど問われ続けてきた万博である。万博の意義が論議される過程で、地域開発／経済効果／環境／自然／交流／市民／科学技術／情報などさまざまなキーワードが浮かび上がってきた。開催地や会場計画についても二転三転し、理念と会場計画との整合性をはじめとするさまざまな問題や矛盾が指摘され議論されてきた。しかしそれらの諸問題は最終的に突き詰められることなく、矛盾を抱え込んだまま万博は見切り発車した。万博が閉幕した今、万博の存在意義は一体何であったのかを適切に回答できる者は少ないのではないだろうか。愛知万博は先行するさまざまな議論によって、焦点が多極化され、焦点がぼやけた「あいまいな万博」であったということができよう。

一般参加者にとっても万博は楽しみ方や見どころが多焦点化され目の付け所に困る「あいまいな万博」であったといえよう。愛知万博は大阪万博のように絞り込まれた画一的文脈によって「国民」を強力に動員するようなことはな

かった。一般参加者として地域社会の人々が万博を体験するためには、既成のフレームは「万博」と個人の関係を規定する力に乏しく、選択に戸惑う選択肢ではなかっただろうか。

以上のように、ピントの定まらない状況のなかで、周辺地域の人々が寄り添いやすかったのが、個々人を取り巻く身近な個人的文脈であっただろう。身近な人間関係、日常的な行為、個人的な趣味などのコードを当て嵌めていくことによって、「万博」は人々にとってしっくりくるものとして経験されていたのではないだろうか。このように考えると、聞き取られた「万博」の経験が個人的・個別的な性格の色彩の強いものとなっていたことを解釈できるのである。

既成のフレームによって、人々の万博の楽しみ方や見方が規定されてくる部分があるといえるが、愛知万博における周辺地域の人々は必ずしもそれらに限定されることなく、それぞれの個人的な状況や置かれた環境に応じて万博の楽しみ方を創発し、個人的・個別的な文脈から万博を享受する枠組みを創り出していた。万博を既成の“万博イメージ”とは異なる水準で、個人的文脈の網をかけ「万博」として消費し、個々人と「万博」との関係を多様に構築していたといえる。

## V おわりに —「万博」はどのように経験されたか—

調査地の地域住民にとっての「万博」とは、体験者が多かれ少なかれ共有するような相同的な万博経験としてではなく、各自の個別的な文脈・物語を組み込むことで享受されるものとして経験されていることが観察された。このような「万博経験」の個別的な性格は今回の愛知万博に特徴的な受容のされ方であったといえよう。

地域社会の人々の「万博」の受けとめ方がこのようなものになったのは、万博の「大義」がはっきりしない「あいまいな万博」であったことが一因していることを述べてきた。

愛知万博が多焦点的・個人的であったことは、愛知万博についてリピーターの目線から分析を行なった加藤によっても述べられている(加藤・岡田・小川, 2006)。そこでは、今回の万博のさまざまな特徴が、「11の物語」としてまと

められており、そのなかで画一的ではなく多様な受容の仕方を用意して「マイ万博」となった愛知万博の特性を述べている。本稿で紹介した長久手地域の調査は、加藤の主張を補強するような結果を示したといえる。

それに付け加えて、長久手地域の事例の考察からいえることは、周辺の地域社会においては、地域社会レベルの問題として「万博」が経験されていなかったことが、個人的な「万博」体験につながった側面があることが判明したことである。もし仮に、何らかの地域社会と万博を規定する強い影響力をもった文脈が生まれていたとすれば、地域社会の人々はそれに寄り添っていたかもしれない。長久手会場の近隣は、村落的な社会的紐帯が息づいている地域が多い。地域社会レベルの共同性には従わざるを得ないのではないだろうか。

愛知万博の突然の登場によって、長久手地域は思いもかけず万博という「非日常」の巨大イベントと対峙することになった。しかし、結果的に、愛知万博は地元地域社会としては開催意義が見出せない万博となった。そのため地域の将来像や地域社会のあり方を根源的に問うような地域社会レベルの課題としてではなく、交通や治安などの卑近な生活問題としてしか問題化しなかった。そして、人々は各自の個別的な文脈や物語を万博に投影することで「万博」とつながっていった。そうした人々はリピーター化し、万博のスペクタクルを次々と消費していった。副次的な見どころや楽しみ方を開拓しつつ、彼・彼女らの万博体験は個別化・個人化していった。

「非日常」の巨大イベントとしてもたらされた万博は、地域の人々の個別的な文脈・物語を適用されることによって、日常化されながら経験されていったといえるだろう。

以上のようなものとして「万博」は地域社会の人々によって経験されていったといえよう。

- 
- 1 当初の入場者数の目標は1500万であったが、会期中の2005年8月18日に目標値に達した。
  - 2 内閣府大臣官房政府広報室が行なった「愛・地球博(愛知万博)に関する世論調査」(2004年9月)による。
  - 3 2006年9月24日には「愛・地球博大復活祭」が名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)で

開催され、約2600人が詰めかけた。また、同年9月18日には愛知県長久手町・文化の家で「ありがとう愛・地球博ライブツアー」が開催され、約750人が詰めかけるなど、各種イベントが続々と開催されている。

- 4 各種イベントでは愛知万博のイメージ・キャラクター「モリゾー」と「キッコロ」（通称・モリコロ）のステージ・ショーが人気を博しており、例えば上記「愛・地球博大復活祭」ではこれらのキャラクターのステージ・ショーを目当てに多くの親子連れが訪れている。また、万博閉幕後に愛知県瀬戸市の海上の森に「帰った」とされる「モリコロ」は、瀬戸市に特別住民登録され、「森の精の特別住民票」が、2005年10月6日から希望者に無料で交付されたが、これが人気を博し「特別住民票」を求める人々の長蛇の列ができ、発行待ちに数時間並ぶという現象も起きた。「モリコロ」は万博の閉幕イベントで森のなかに姿を消して「海上の森へ帰った」と演出されたが、「モリコロ」人気を受けてか、万博の理念継承活動をPRするための「復帰」が発表された。万博閉幕1周年を記念した「モリコロ」のオリジナル商品が売り出されるなど、「モリコロ人気」振りは衰え知らずであり、愛・地球博記念公園（通称・モリコロパーク）も入場者でにぎわっているようである。
- 5 各地の観光地やテーマパークへの入り込み客数や2005年度決算における利益の増減、あるいは2006年夏期の百貨店の売上げなどの経済ニュースが、「愛知万博の影響」という説明項によって解釈されながら報道されている。また、万博の理念継承活動や万博を契機とした交流事業、記念イベントなどの社会ニュースや生活情報が頻繁に提供されている。
- 6 万博に対する愛知県知事の評価についての発言や、博覧会国際事務局（BIE）事務局長が「最悪の状況で始まり、最高の結果になった」と高く評価した言葉を取り上げた報道（いずれも2006年7月）がその一例である。また、愛知万博の経済的な収支決算や、各方面での経済的影響、特に愛知万博による経済効果についての話題が頻繁にニュース報道されている。
- 7 たとえば、2006年6月25日に愛知県津島市の天王川公園で行なわれた「木曾三川天王川プロジェクト」や、2006年9月22日の名古屋市中区でのイベント「EXPO Cafe ショップ」などが挙げられる。
- 8 加藤は、万博の「公式ラベリングは、万博後に〈理念の自立化〉といえるような発酵現象を生み出し、行政主導のさまざまな理念継承活動を逆規定してきている」と指摘している（加藤・岡田・小川，2005，p.12）。
- 9 古川（1998）、荒俣（2000）、松田（2003）、串間（2005）、テストユ（2005）、橋爪（2005）、榎木（2005）など。
- 10 プロジェクト・メンバーそれぞれの専門性から文化人類学的なアプローチによる愛知万博の展示内容の検証、数量的なアプローチによる地元社会の住民意識の検証などが行なわれた。筆者も微力ながら研究を分担協力することとなった。筆者が行なったのは本稿に紹介する聞き取り調査を中心とする住民意識についての研究である。
- 11 たとえば、新聞社説で愛知万博が主題として扱われた件数を数えてみると、1996年以降2005年の愛知万博開幕までで、全国紙では朝日新聞7件、毎日新聞9件、読売新聞7件であり、地元紙の中日新聞では40件である。
- 12 市民による愛知万博についての県民投票条例の制定を求める署名活動は1997年、2000年の2回にわたって行われたが、市民グループが直接請求した県民投票条例案はいずれも愛知県議会で反対多数で否決された。



- 13 各種のニュース報道や新聞記事などによって逐次報じられてきているが、ここでは愛知万博についての種々の課題や問題点を包括的にまとめている出版物に『虚飾の愛知万博』（前田，2005）などがあることを紹介しておく。
- 14 瀬戸市に限定せず、より広く愛知県全体あるいは中部地域全体を「地元」として対象化し、万博との関係について論じる報告や研究も存在している。万博会場の構想は二転三転したため、候補地と関係する「地元」もその都度変わっているといえる。
- 15 先行する研究報告としては、高野（2005）、佐々木（2005）がある。
- 16 名古屋市の東隣、豊田市の西隣、瀬戸市の南隣に位置する。
- 17 「長久手町ホームページ」（<http://www.town.nagakute.aichi.jp/>）参照。
- 18 1970年～2002年まで。2006年から「愛・地球博記念公園」（通称モリコロパーク）として開園。
- 19 1989年時点では、愛知県豊田市北部の八草地区が有力な候補として挙がっていた。
- 20 ただし、町村によれば、瀬戸地域での誘致は「動員」された側面があること、瀬戸地域での万博に対する冷静な態度があったことも同時に指摘している。
- 21 「万博とくらしを考える長久手町民の会」によって、長久手地域における愛知万博の諸問題が提起されている。ただし、万博を拒絶するような強い反撥ではなく、計画の柔軟性や住民合意を求めるような内容の主張となっている。（「長久手町における愛知万博開催の問題点」参照（<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Icho/2865/souko/nagakute.html>））
- 22 上郷地区の二つの集落が、愛知青少年公園内にある「こいの池」、「かえで池」、「めだか池」などの複数のため池を農業用水源として利用してきた。青少年公園以外にも周辺地域にはため池が多数存在している。
- 23 長久手町東部地域では地域説明会などは、「2回しか行なわれていない」（区長経験者）そうである。これに対して瀬戸地域では県や市などが最大で年に61回（1995年）と盛んに説明活動を行なった。
- 24 住宅地化・商業地化が進んだのは西部地域（長湫地区）であり、人口の伸び率も高い。長久手町の人口・世帯数の伸びを牽引しているのはこの地域である。ただし、東部地域（岩作地区・上郷地区）ではここ10年人口が増えておらず、ほぼ横ばいである。
- 25 長久手町によって実施された住民意識調査（長久手町総務部企画課，1997；長久手町，2002）によれば、「住みよい」「まあ住みよい」と回答したのは78.0%（1997年）、85.6%（2002年）、また、今後の居留意志については「住み続けたい」との回答が65.2%（1997年）、69.7%（2002年）、また愛知県立大学地域連携準備室で行なった長久手町民に対するアンケート調査でも、「ぜひいつまでも住みたい」「なるべく住んでいたい」との回答が80.8%（2006年）と、いずれも高い満足度を示している。
- 26 ただし、万博会期中は、各種メディアによって連日流される万博情報をもとにイベントやショーなどを目的に出かけている。

#### 参考文献

- 愛知県立大学地域連携準備室編（2007予定）『愛知県立大学地域連携センター研究報告』1  
荒俣宏（2000）『万博とストリップ』、集英社  
古川隆久（1998）『皇紀・万博・オリンピック』、中央公論社  
橋爪紳也監修（2005）『万国びっくり博覧会』、大和書房  
一橋大学社会学部町村ゼミナール編（1999）『博覧会をめぐる「地元」の社会学』  
一橋大学社会学部町村ゼミナール編（2002）『愛知万博 海図のない航海』

- 一橋大学社会学部町村ゼミナル編 (2005) 『愛知万博と向き合う』
- 石原紀彦 (2005) 「愛知万博をめぐる市民運動がもたらしたもの——新しい社会運動の構想力」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 加藤晴明・岡田朋之・小川明子編著 (2006) 『私の愛した地球博——愛知万博2204万人の物語』、リベルタ出版
- 串間努 (2005) 『まぼろし万国博覧会』、筑摩書房
- 町村敬志 (1999) 「地域開発としての博覧会——愛知万博招致をめぐる社会過程——」『博覧会をめぐる「地元」の社会学』、一橋大学社会学部町村ゼミナル編
- 町村敬志・吉見俊哉編著 (2005) 『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、有斐閣
- 前田栄作 (2005) 『虚飾の愛知万博』、光文社
- 松田京子 (2003) 『帝国の視線 博覧会と異文化表象』、吉川弘文館
- 松浦さと子 (2005) 「市民参加型社会に必要な新しいメディアのかたち」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 長久手町 (2002) 『長久手町住民意識調査報告書』
- 長久手町史編さん委員会編 (2002) 『長久手町史 本文編』
- 長久手町総務部企画課 (1997) 『長久手町住民意識調査報告書』
- 永安顕子 (2005) 「検討会議のエスノグラフィ」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2005) 『月刊世論調査』
- 佐々木葉 (2005) 「場と情報——万博への関わり」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 榎木野衣 (2005) 『戦争と万博』、美術出版社
- 成元哲 (2005) 「リスク社会における生の政治——「成長」から「安全」へ」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 高野雅夫 (2005) 「愛・地球博体験的市民参加論」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- テストユ・B (2005) 『万博のパンドラの箱』、横川晶子訳、講談社出版サービスセンター
- 後房雄 (2005) 「愛知万博と「市民参加の新しい波」のすれ違いの構造——市民参加検証フォーラムの経験から」『市民参加型社会とは——愛知万博計画過程と公共圏の再創造』、町村敬志・吉見俊哉編著、有斐閣
- 吉見俊哉 (2000) 「愛知万博 市民参加型社会が始まっている(上)二一世紀の扉を開けるのは市民自身だ。愛知万博の「迷走」に、日本社会の未来を見る」『世界』682
- 吉見俊哉 (2001) 「愛知万博 市民参加型社会が始まっている(下)愛知万博の「迷走」に〈未来〉を見る」『世界』683
- 吉見俊哉 (2005a) 「特集「環境博」としての愛知万博——"世紀の祭典"の今日的意義」『Front』17(9)
- 吉見俊哉 (2005b) 「市民参加型社会と愛知万博」『Front』17(9)
- 吉見俊哉 (2005c) 『万博幻想』、筑摩書房